

愛の権威のもとに生きる

日本基督教団
塚口教会
〒661-0012
尼崎市南塚口町
2丁目34-3
電話 06-6429-3019

愛の権威のもとに生きる

マルコによる福音書 一一・二七―三三

沖村裕史

私たちは時に、神の不在を嘆きます。その嘆きが「神の死」を宣告する声によってかき消されることもあります。神は死んだのでしょうか。それともただ不在なのでしょうか。この世界の現実には、神がここにおられるということ、ほとんど、いえ何ひとつ示さないとでもいうのでしょうか。人々は、日々の生活で神を抜きにして考え、決断しています。あたかも神がおられないかのように生きています。ほとんどの人は、神が人生と人間の運命に介入するとは信じていません。人々は、一切を自らの手に握ってしまつたかのようなのです。神と神の行為に一寸の余地も残っていないかのようなのです。

紀元前6世紀、今日と何一つ変わらないこうした状況に対して、預言者エゼキエルは神の不在を嘆いて終わりとせず、むしろ、この神不在の状況を、神の裁きとして、民自身の罪の結果として、民に突きつけます。エルサレムの滅亡を引き起こしたのは、まさに選びの民の傲慢さゆえである、と。現代を生きる私たちにしても、神不在は神の裁きです。神不在の言葉を、神の裁きのしるしとして見抜く者だけが、神の御霊が現臨したペンテコステの奇跡に目を開かれ

ます。

ペンテコステと教会創立記念を祝う、この恵みの日に与えられた御言葉は、群衆の歓呼の中でエルサレムにお入りになった後の、小さな、しかし決定的な出来事です。

直前一八節「祭司長たちや、律法学者たちはこれを聞いて、イエスをどのようにして殺そうかと計った」。イエスと論争している今、このとき、彼らの心の中にあつたものは殺意でした。殺意の中でやり取りがここに描かれています。十字架での処刑を決した最高法院の裁判が既にここから始まっています。その意味で、エゼキエルが語つた神の不在と神の裁きが、人の裁きと神の裁きとがぶつかり合っている。それがこの何気ない対話の真実です。

ここできつかけとなつたのは、「何の権威で、このようなことをしているのか」という祭司長たちの問いかけでした。「このようなこと」とは何か。二日前にイエスは神殿に來られ、そこで商売をしていた人々を追い払われ、台をひっくり返すという騒ぎを起こされました。そのことが、祭司長たちには我慢なりません。なぜなら、ここは自分たちの領分であると思つていたので、これが気に入らない。不愉快です。困るのです。ここは自分の領域だと思つているところに誰かが侵入して来る。それが殺意の原因でした。イエスを殺すということ、は、イエスが邪魔だということ、です。

問われたイエスはお答えになります。「ではひとつ尋ねるから、それに答えなさい。

そうしたら何の権威でこのようなことを自分がしているのか、あなたたちに教えてあげる。」そこで問われるのは、バプテスマのヨハネのことです。あのヨハネがしたバプテスマは、天からのものであつたか、つまり、神からのものであつたか、それとも人からのものであつたか。

信仰を持つということは、今も私たちの生活の中に、神の霊がそのようにして入り込んで来られる、神の自由を受け入れるということ、です。しかしこれが難しいのです。イエスを通して、そして聖霊を通して神がなさることを、すぐに素直に受け入れるということがとても難しい。それは自分の権威に関わると思つてしまうのです。自分たちの自由が侵害されると思つたのです。神が私たちの中にある出来事を起こす。いえ、決定的な出来事を起こした時に、私たちは困つてしまいます。その困惑の中で、私たちは、まさに根こそぎ揺り動かされます。

祭司長たち、律法学者たち、長老たちが、なぜ、イエスを殺そうとしたのか。自分たちの存在が危なくなるからです。自らの権威を誇り、うぬぼれ、それを振り回すだけの者は、決して他の権威を受け入れようとはしないものです。自分の権威と他人の権威とが対立するからです。祭司長や律法学者や長老たちは、神の名を使い、神の権威を借りて、多くの人々を罪に定め、愛ではなく罪への畏れによって支配しようとした。それと同じように、自らの権威を振りかざして、自らが主人となろうとする者は、他の権威を利用することはあつても、自分以外の権威を決して受け入れようとはしません。

それでも、そんな私たちがこの世の様々な権威から自由であるのは、私たちが反骨精神溢れる自由人だからなのではありませ

ん。私たちが、この世のどんな権威でもなく、ただ神の、イエスの権威のもとに置かれて「僕」だと知っているからです。しかし、神の権威に服従する私たちの姿を見て、時にはキリスト教を奴隷の宗教だと揶揄します。現代人は「僕」になるのが嫌いだからです。みんなが主人になりました。

自らの権威を保ちつつ、他者を支配し、自分の思いどおりに生きることが幸せだと思ひ込んでいます。人々が権力を求め、富を集め、情報を握ろうとするのはそのためです。もちろん誰であれ、支配されるのは嫌です。命令されたり、管理されたりするのが喜ぶ人などいないでしょう。現に、独裁政治だとか、ワンマン上司だとか、身勝手な夫だとかに支配されて生きている人たちが、どれほどの閉塞状況にあるか。夫を「主人」と呼ぶことに違和感を覚える人が増えているのも、不思議なことではありません。しかし、それもこれも、支配されること、権威の下に生きることが、喜びとならないような支配や権威であるならば、という大前提のもとで成り立つ話です。もしも支配されるのが、権威のもとに生きることが、真の幸いをもたらすような支配、権威を知つたならば、話は全く変わってくるはず、です。私たちは本當の主人を、本當の主人に支配してもらえ喜びを知っているのでしょうか。もしもその主人のまことの尊さと、その主人に支配される喜びを知つたら、むしろ「どうかこの私を僕にしてください」と心底願うこと、でしょう。「僕」を愛し、「僕」を救うためにいのちをかける主人。それが、神の子キリスト・イエスです。そんな主人の下に、そんな愛の権威のもとに生きることが出来る人は、幸いです。

（二〇一五年五月二四日、ペンテコステ・創立記念礼拝）